集書日誌71

高橋新太郎　学習院女子大学教授

『戸籍質疑録』に見る明治の諸相

和洋会展の書林自然閣から戸籍学会の『戸籍質疑録』第29号～51号（明治36年3月～38年1月）を得た。明治31年7月16日より新民法・新戸籍法が施行されたのをうけて、明治33年11月19日に第1号が発刊され、第29号からは、司法省民刑局長石渡敏一を戸籍学会会長に迎えて名誉賛助員に各地方裁判所長、賛助員に各区裁判所の判事が名を列ねて誌面の充実を図っている。質疑に時代相が躍如として興深い。

例えば「棄児」の就籍手続きについての近藤安五郎なる老人の件では、〈無籍者ハ五十二歳ノ老人ナリトモ棄児トシテ取扱フコトヲ得ル〉との解答が示されている。また当今は女子の命名に「子」をつけないのが多数派を占めているが、〈戸籍届ニ女子ノ名ヲ「何子」ト届出ツルノ当否〉などという質疑もある。「中宮何子」「北条政子」等、古来高貴の身分の女子に用いられることもあっての発疑である。「解答」に〈子ハ字義上敬称語ニ相違ナキモ其字義ハ暫ク措キ現今ノ慣習ニ依レハ子ノ字ヲ名ノ内ニ包含セシムル者多シ此場合ニ於ケル子ハ敬称語ニ非ス之ヲ以テ一種ノ「名ニ用ユル」接尾語ト云ハサルヘカラズ故ニ敬称語トシテ子ノ字ヲ付シアルトキハ不当ナルモ然ラサルトキハ正当ナル用語ト云ハサルヲ得ス既ニ子ノ字ヲ無意味ニ用ユル慣習ヲ普通ナリトセハ子ノ字ヲ記載セル届書ト雖トモ正当ナリトス〉とある。

今の人には無縁な「族称」の問題もある。〈明治十年丁丑ノ乱ニ与シタル科ニ因リ除族ノ上平民籍ニ編入セラレタルモノハ分家ヲナシタルモノナルモ其後大赦ノ恩典ニ浴シ復権ヲ得タルモノハ旧法ノ取扱ニ依リ家名ヲ廃シテ本家ニ復籍シタルモノナルモ其当時右ノ届出手続ニ洩レタモノハ現時ニ至ルモ尚平民籍トナリ居ルモノアリ……〉鹿児島からの質疑である。維新革命で辛酸を嘗めた仙台藩の下級武士の家に生をうけたわが亡父も、時折呪文のごとくに「士族」を口にした。

「雑纂」欄には、こんな紹介もある。岡山県和気郡出身で日露戦争で戦死を遂げた寺田五代之松歩兵特務曹長の父の名は五代松で、曹長がその子に付けた名が「征太露」。名は時代を映す。かつての「征露丸」は、第二次大戦後に下痢止めの「正露丸」として甦った。小生よりも若い知人に飯島「東亜」が在り、言語学の故服部四郎教授の御長女は「亜細亜」である。御夫婦ではモンゴル語で会話を交し、父子の間では日本語で、と仄聞したことがある。高知県土佐郡役所で起こった「処女の徴兵検査」という信じられないような珍話柄もあるが、紙数が尽きた。